

# 総合日本語コース C1 (初中級) クラスの開設と 活動・教材開発

長野 ゆり・笹原 幸子・寺下 優子

## はじめに

金沢大学「総合日本語コース」の「日本語クラス」には現在、初級から上級まで7レベルが存在するが、そのうちの一つ:「C1 (初中級)」というレベルは、コース開設当初は存在せず、平成12 (2000) 年度後期に新たに作られたものである。本稿では、このC1 (初中級) レベル成立の経緯とその必要性、教授内容や目標について述べ、また、教材作成活動の中間報告を行う。

## I. C1 レベル開設の経緯とその内容

### 1 「総合日本語コース」・「日本語クラス」の概要

#### 1.1 「総合日本語コース」の概要

C1 (初中級) レベル開設の経緯を述べるにあたって、まず金沢大学「総合日本語コース」の概要を紹介しておく。

「総合日本語コース」は平成10 (1998) 年10月、それまで行われていた「全学向け日本語補講」を母体とし、それを拡充・再編するという形で開設された (太田 (2000))。コースの目的は「大学・大学院での学習・研究活動の基盤となる実践的日本語力を養う」ことである。

クラスの種類としては「日本語クラス」、「漢字クラス」、「技能別クラス」の3種類がある。このうち「漢字クラス」では漢字の習得を、「技能別クラス」では幾つかの特定の技能の習得を目指す、「日本語クラス」では、日本語の四技能の総合的な習得を目指している。

留学生センター所属の学生のうち、KUSEP - 金沢大学短期留学プログラム - の学生、日本語・日本文化研修生、日韓理工系学部留学生は、「総合日本語コース」の「日本語クラス」を履修することが義務付けられている。

C1 (初中級) レベルは、この「日本語クラス」の1レベルとして、コース開設2年後に新たに設けられたものである。なお、「日本語クラス」は角間・小立野の2キャン

パスで開講されており、C1(初中級)クラスも現在ではこの両キャンパスで開講されているが、C1レベル開設の端緒となった問題が典型的に発生し、したがって開設の必要性が強く生じたのは角間キャンパスにおいてであるので、以下の記述はすべて角間キャンパスに限定して行うことにする。

## 1.2 「日本語クラス」の概要①(平成14(2002)年度後期現在)

現在「日本語クラス」には、初級から上級までの7レベルがある。各レベルの学習内容と到達目標を表1に、使用教科書(主教材)を表2に示す。週あたりコマ数は、A:5, B:4, C1~F:3(90分授業で15週)である。

表1 「日本語クラス」各レベルの学習内容と到達目標

レベル	学習内容と到達目標
A (初級1)	平仮名・カタカナ・漢字109字、初級文法の前半を学習し、その運用力を養う。日常生活に必要な簡単な会話、平易で短い文章の読み書きができるようになる。
B (初級2)	初級文法の後半を学習し、その運用力を養う。日常生活に役立つ会話、簡単な文章の読み書きができるようになる。
C1 (初中級)	C2への橋渡しレベル。一度は学んだが正確に覚えていない、または身に付いていない初級文法の復習をしながらその運用練習を充分に行うことにより、C2への足固めをする。C2に備えて漢字の読みも学習する。
C2 (中級1)	主として書き言葉の文章(漢字仮名混じり文)の読解を中心として学習し、そこに使われている表現や構文を学び、それを題材にした「聞く・話す・書く」活動ができるようになる。
D (中級2)	上質で文化的深み・広さを持った文章(生教材を多少書き直したもの)の読解を中心として学習し、そこに使われている表現や構文を学び、それを題材にした「聞く・話す・書く」活動ができるようになる。
E (上級1)	現代日本社会の幾つかのトピックについて書かれた文章(すべて日本人向けに書かれた生教材)の読解を中心として様々な活動を行い、日本語の運用力をさらに高める。日本語や日本文化・日本社会についての理解も深める。
F (上級2)	これまでに習得した日本語の応用能力をさらに高めることにより、大学や大学院での学習・研究の基盤となる実践的日本語力を養うことを目指す。現代日本社会の実態・問題を様々な視点からとらえ、考える。日本語や日本文化・日本社会についての理解もさらに深める。

表2 「日本語クラス」各レベルの使用教科書(主教材)

日本語クラス	著者・編者／教科書名／出版社
A (初級1)	スリーエーネットワーク『みんなの日本語 初級Ⅰ』スリーエーネットワーク
B (初級2)	スリーエーネットワーク『みんなの日本語 初級Ⅱ』スリーエーネットワーク
C1(初中級)	文化外国語専門学校『新文化初級日本語Ⅱ』凡人社, 自主作成教材
C2(中級1)	文化外国語専門学校『文化中級日本語Ⅰ』凡人社
D (中級2)	文化外国語専門学校『文化中級日本語Ⅱ』凡人社(1～6課)
E (上級1)	鎌田修他『中級から上級への日本語』The Japan Times
F (上級2)	山本富美子他『国境を超えて』新曜社, 生教材

### 1.3 「日本語クラス」の概要②(平成10(1998)年度後期～平成12(2000)年度前期)

1.2で述べた「日本語クラス」の7レベルのうち, C1(初中級)は, 平成12(2000)年度前期までは存在していなかった。すなわち, Bレベルを修了した学生, また初めて「総合日本語コース」を履修する学生のうちプレースメントテストで「Bレベル修了相当」と判定された学生は, 現在のC2(当時はC)レベルを履修していたわけである。(D, E, Fの使用教科書は表2とは異なる部分もあったが, それは本稿の内容に直接影響しないので, 紙幅の都合上ここには記載しない。)

### 1.4 C1レベルが存在しなかった時期の問題点

上記1.3の時期, Cレベルのクラス運営は多くの困難を抱えていた。

まず, 中途脱落者が多かった。次に, 履修を続けた学生からも, 「よく分からない」「ついていくのが大変だ」という不満が続出した。さらに, 最後まで履修を続け定期試験を受験した学生についても, 合格率は, 他のレベルと比較してかなり低かった。つまり, 「Cレベルを修了することは非常に難しい」という状況が生まれていたのである。

当然ながらここで, 「コースデザインー特に初級と中級を繋ぐーに問題があるのではないか」という疑問が生まれてくる。以下, この点を少し検討してみる。Cレベルの主教材:『文化中級日本語Ⅱ』は「初級段階の学習(約350時間)を終了した者」を対象としている。「総合日本語コース」のBレベル修了者の学習時間総計(「日本語クラス」A・B, 及び「漢字クラス」Bーセンター所属の学生にとっては必修ーにおける学習時間の総計)は225時間で125時間不足しているが, この不足分は, 毎回の授業後に課される宿題(提出は義務であり成績評価に反映される), 自宅学習, また春期及び夏期に実施している「特別補講」(每期各クラス9～12回程度実施)によっても十分補えるものと考えられる。したがって, コースデザインそのものに決定的な不備があるとは

思われない。

Cレベルの修了状況を検討してみると、不合格となった学生には、日本語を学習する上での幾つかの明確な特性が見られることが分かる。したがって、Cレベルの問題に対処するためには、これらの学生への対応を考えればよいということになる。2で、この時期のCレベルの修了状況、及びC1レベル開設以後のC2の修了状況を示す。

## 2 C・C2レベルの修了状況

### 2.1 Cレベルの修了状況（C1クラス開設以前）

平成12（2000）年度後期にC1が開設されるまでの5期に渡るCレベルの修了状況を表3に示す。本来ならばCクラスの全登録学生を調査対象にすべきところであるが、中途脱落者はここでは対象から除外した。中途脱落者とは合格しなかった学生のうち、履修を学期途中で中断した学生、出席率が半分に満たない学生、中間・期末の定期試験を受験しなかった学生を指す。

中途脱落者を考察対象から外すのは、これらの学生が合格しなかったのには日本語教育上の理由のみならず、その他の多種多様な理由が想定可能であるからである。その理由は学生個々の事情により多岐に渡っていたと推察されるが、一方では、病気・怪我など健康上の理由、また家庭の事情による帰国や専門の研究活動との両立の困難、さらにはアルバイトのための生活の多忙さなど、日本語教育上の問題以外の理由が考えられる。他方、そのような理由は全くなく、純粋にCレベルの学習に困難を感じたために脱落していった学生も相当数いたと思われ、中途脱落者のうち、この後者の学生は是非考察の対象としたいところであるが、残念ながら、全中途脱落者についてその脱落理由を示す資料は存在しない。脱落の理由が不明確である以上、これら中途脱落学生を一様に不合格学生と扱うには無理があると判断し、考察の対象から外すことにした。したがって表3での調査対象学生は、Cクラスを最後まで履修し、学期を通し半分以上の出席があり、中間・期末の両定期試験をともに受験した学生とし、これらの学生を履修者と呼ぶことにする。

表3 Cレベルの修了状況（C1クラス開設以前）

	1998 後期	1999 前期	1999 後期	2000 前期	2000 後期	合 計
履 修 者	7	19	16	12	7	61
合 格 者	6	12	12	8	7	45
不 合 格 者	1	7	4	4	0	16

表3から、総履修者数61名中、合格者は45名であり、Cレベル合格率は73.8%であることがわかる。最後まで履修し、授業にも半分以上は出席し、定期試験も受けながら26.2%すなわち4人に1人強の学生が不合格となっているという残念な結果が読み取れる。

次に、参考までに中途脱落者を含めたCレベル全登録者の状況を表4に示す。

表4 Cレベルの状況 (C1クラス開設以前)

	1998 後期	1999 前期	1999 後期	2000 前期	2000 後期	合 計	割 合	
全 登 録 者	10	23	22	18	8	81	100%	100%
中途脱落者	3	4	6	6	1	20	24.7%	44.5%
不 合 格 者	1	7	4	4	0	16	19.8%	
合 格 者	6	12	12	8	7	45	55.5%	55.5%

中途脱落者は全登録者のおよそ4分の1にあたり、不合格者と合わせるとその割合は44.5%となり、Cクラスに登録した学生の半分弱の学生が合格に至らなかったことになる。すなわち、全登録者のうち無事Cレベルを修了し合格した学生は全体の55.5%にすぎないという深刻な事態が浮き彫りとなった。

## 2.2 不合格者の属性 (C1開設以前)

表3で示した不合格者16名の属性を表5に示す。

表5 Cレベル不合格学生の属性 (C1開設以前)

	出身地域	金沢大学での所属	新規/継続*
1	ヨーロッパ	留学生センター (KUSEP)	新規学生
2	ヨーロッパ	留学生センター (KUSEP)	継続学生
3	ヨーロッパ	留学生センター (KUSEP)	継続学生
4	ヨーロッパ	留学生センター (KUSEP)	新規学生
5	ヨーロッパ	留学生センター (KUSEP)	新規学生
6	ヨーロッパ	留学生センター (KUSEP)	新規学生
7	ヨーロッパ	留学生センター (KUSEP)	新規学生
8	アメリカ	留学生センター (KUSEP)	新規学生
9	アメリカ	留学生センター (KUSEP)	新規学生
10	中 国	留学生センター以外	新規学生
11	中 国	留学生センター以外	継続学生

	出身地域	金沢大学での所属	新規／継続*
12	中 国	留学生センター以外	継続学生
13	ロ シ ア	留学生センター以外	継続学生
14	ヨ ー ロ ッ パ	留学生センター以外	新規学生
15	中 東	留学生センター以外	新規学生
16	中 東	留学生センター以外	継続学生

\*「継続学生」とは「総合日本語コース」Bクラスを修了後、Cクラスでの学習を継続した学生を指し、「新規学生」とは海外の大学で日本語初級を履修後、プレースメントテストでCクラスに振り分けられた学生を指す。

表5から、不合格となった学生のうち9名が留学生センター所属（KUSEP）の学生であり、その圧倒的多数の7名が「新規学生」であることがわかる。不合格者の日本語学習上の特性については3で詳述する。

### 2.3 C2レベルの修了状況（C1開設以降）

平成12（2000）年度後期にC1が開設されて以降、平成13（2001）年度前期より、C1経由後のC2受講が可能になった。平成13（2001）年度前期から現在までの3期のC2レベルの修了状況を表6に示す。統計対象学生は2.1で示した表3の条件と同様である。

表6 C2レベルの修了状況（C1クラス開設以降）

	2001 前期	2001 後期	2002 前期	合 計
履 修 者	12	5	10	27
合 格 者	11	5	9	25
不 合 格 者	1	0	1	2

表6から、総履修者数27人中合格者は25名で、合格率は92.9%であることがわかる。不合格者2名のうち1名は非漢字圏出身の「留学生センター（KUSEP）」所属の学生であり、もう1名は漢字圏出身の「留学生センター以外」所属の学生である。

### 2.4 C1開設以前・以降のC2レベル修了状況比較

C1レベル開設以前と開設以降のC2レベル修了状況の比較を表7に示す。

表7 C2レベル修了状況(C1開設以前と開設以降の比較)

	履修者数	合格者数	不合格者数	合格率
C1開設以前(5期分)	61	45	16	73.8%
C1開設以降(3期分)	27	25	2	92.9%

C1が開設されてからまだ3期しか経過しておらず、この調査をもって判断するには時期尚早ではあるが、C1クラス開設後の合格率が73.8%から92.9%へと有意に上昇している(カイ自乗検定)という状況からは、事態が好転へと向っていることが読み取れ、C1クラス開設がC2への橋渡しにつながっているという一応の結果は得られたと考えられる。

### 3 Cレベル不合格者の特性

#### 3.1 考察の対象

不合格者の所属は、「留学生センター」と「留学生センター以外」とに大別される(表5)。

「留学生センター以外」所属の学生は、大学院生・研究生など、専門分野の学習・研究活動の傍ら(殆どの場合そのための「道具・手段」として)日本語を学ぶ学生であり、日本語学習の義務がないばかりか、しばしば専門分野の活動との両立が困難になる状況に置かれている。また私費留学生が多くアルバイトに時間を割かれるため自宅学習に十分時間をかけられないなど、幾つもの不利な条件を備えており、高い学習意欲と強い意志を持続しなければ合格は難しい。したがって、彼等が不合格となったことはさして不思議ではない。言い換えれば、彼等が不合格となった原因は、日本語教育上の問題以外のものである可能性がきわめて高いのである。

この理由によって、不合格者の日本語学習上の特性を考えると、彼等は考察の対象から外すことにする。

#### 3.2 KUSEPの学生の日本語学習上の特性

「留学生センター」所属の学生は9名全員がKUSEPの学生である(表5)。中途脱落者も含めると、その数は17名に上る。

KUSEPの学生は日本語学習が必修であり(したがって他の科目の学習よりも優先される)、また、奨学金を受けていることもあり、日本語学習に十分な時間を割くこともできる。しかも最後まで履修を続け2回の定期試験も受験していることから、修了しようという意志は十分にあったものと考えられる。にもかかわらず不合格となった

のは何故か。KUSEP の学生たちには、彼等に特徴的な日本語学習上の特性が見られるが、それはほぼ次の2点に集約できる。

### 3.2.1 特性1：非漢字圏の学生であること

不合格となった KUSEP の学生は、9 名全員が非漢字圏の学生である。

C（現在の C2）レベルでは、初めて書き言葉の文章（漢字仮名混じり文）の読解を中心とした学習に取り組む（表1）ため、学生は漢字語彙の洪水にさらされることになるが、非漢字圏の学生たちがここで大きな困難に直面することは明らかである。非漢字圏であることは、合格を難しくしている一つの要因であることは間違いない。

### 3.2.2 特性2：海外の大学で日本語初級を履修してきたこと

→初級文法の運用力が不足していること

KUSEP の9名の学生中7名は、「総合日本語コース」でBレベルを修了してCレベルに進級した学生ではなく、プレースメントテストで「Bレベル修了相当」と判定されCレベルに振り分けられた学生たちである。すなわち彼等は、来日前の在籍大学で日本語初級を履修してきたのである。ただし、主専攻としてではないため学習時間も十分ではなく、一通り学習した（したがってプレースメントテストでは、かろうじてBレベル修了相当と判定されてしまう）とはいうものの、初級後半の内容を十分に消化し身に付けているとは言い難い。

表1に示したようなCレベルの学習内容をこなすためには、初級文法をひとつお理解しているだけでは不足で、それを十分に使いこなし運用する力が求められるが、彼等にはその力は不足していると言わざるを得ない。

実はこの第二の特性が最も重要で、C1というレベルを新しく創るに至らしめた要素なのであるが、それは次の4で詳述する。

## 4 C1レベル開設の必要性

3で述べたことから、KUSEP の学生たちがCレベルの学習内容をこなすためには、彼等がCレベルに進む前に、次の2点を補強することが求められる。

1) 漢字学習（特に「読み」）

2) 初級文法を復習し、未習項目を補い、その運用力を高めること

一つの考え方としては、上記2点をBレベルのシラバスに組み込む、ということも可能であるが、しかしながら、この方法ではうまく機能しない理由が二つ存在する。

一つは、上記の段階を特に必要としない学生が存在することであり、もう一つは、



KUSEP の学生たちの来日前の日本語の学習背景である。

プレースメントテストの結果「Bレベル修了相当」と判定される学生たちは、来日前に大学で初級日本語を「曲がりなりにも」一度は学習して来た学生である。この「曲がりなりにも一度は学習した」ということが、C1という独立したレベルを創るに至った大きな理由である。彼等は大学で1年から2年「初級日本語」を履修しているので、「初級は修了した」と思っているが、実はきちんと修了してはいない。

ゼロ初級ならば、Aレベルから始めることに何ら問題はない。また、初級後半の学習内容を十分にマスターし身に付けているならば、中級から始めることにこれも問題はない。彼等の問題は、「中級から始めるには初級の内容が身につけていないが、かといって初級から始めるには学習歴があり過ぎる」という点なのである。このような学生たちをBクラスに置くと、来日前に（一度は）学習した初級の文法事項の説明を再度一から聞かされることになり、授業に対する興味が著しく削がれる結果となる。彼等に必要なのは、初級後半を一から再度学習し直すことではなく、それを思い出し、未習項目を補い、十分な練習をすることによって使いこなせるようになることなのである。それと同時に、もちろん漢字の学習も必要である。

以上のような事情から、Bレベルの次に、上記のような学習目標を掲げるC1というレベルを新たに設けることになった。

なおBレベルからの進級形態としては、次の二通りのコースが可能である。

- 1) B→C1→C2
- 2) B→C2

初級後半を十分にマスターし且つ漢字の問題も特にない学生は、C1を経由せずにC2クラスを履修することができる。Bレベル修了者が上記1)2)のどちらのコースで進級するかは、学生本人の希望も聞いた上で、Bクラスの担当教師が決めている。大筋においては、漢字圏の学生で成績優秀者は2)のコースを取り、非漢字圏の学生の大多数は（成績優秀者であっても）1)のコースで進級している。また漢字圏の学生であっても、「聞く」・「話す」ことが苦手でその力をつけることを希望する学生も、1)のコースで進級している。

C1の学習内容をBの中に組み込むのではなく、独立したレベルとして立てたことにより、このように、学生の特性に合った履修形態を選択することが可能になった。

C1・C2レベルに共に「C」を冠することにしたのは、C1はC2への準備段階であり橋渡しレベルであること、C1・C2は共にBの次に位置するレベルであることを明確にしたかったからである。

## 5 C1レベルの目標とコースの内容

### 5.1 対象とする学生とその特性

#### 5.1.1 対象とする学生

C1レベルが対象とするのはまず、来日前に在籍大学で初級日本語を主専攻としてではなく履修してきた学生で、C2レベルで学習するには力不足であるとプレースメントテストで判定された学生である。またそれ以外にも、「総合日本語コース」における初級後半レベル（Bレベル）を修了した学生のうち、日本語を運用する力、特に話す力、読む力において力不足だと判定され、C2レベルの履修が難しいと思われる学生を対象としている。

#### 5.1.2 学生の日本語学習背景

C1が対象とする学生の日本語学習背景に触れておく。まず、「総合日本語コース」Bレベルを修了した学生は「みんなの日本語初級II」を主教材にしたコースで学習をしてきている。また、海外の協定校から短期留学プログラムで金沢大学へ来てC1に振り分けられた学生は、協定校により異なったテキストを使っているため、背景は大学によって多少違うが、各大学ともに汎用性のある初級総合テキストを使用しているので、大きな差異はないと思われる。もしあるとすれば、どのようにどのくらい教えたかという教授法や日本語クラス受講時間数の違いに起因するものだと考えられる。ただし、ここではそれに言及せず、初級後半のテキストを使って一応学習したという認識だけを持つことにする。

#### 5.1.3 学生の心理的側面

来日前に大学で日本語初級を学習してきた短期留学 KUSEP の学生は一般的に以下のような心理的特徴を持つ。

- 1) 自国の大学で一応初級レベルの日本語を学習しているので、自分は中級レベルのクラスへプレースされるはずだというプライドを持っている。
- 2) 構造シラバスになっている初級クラスで自分が既に知っていることをもう一度学習するのは堪え難いと思っている。
- 3) 初級文法の復習は独習でなんとかするので、すぐ中級クラスへ行きたいと思っている。つまり、クラスで易しいことは勉強したくないと思っている。

このように、自分の日本語レディネスと実際に自分が勉強したいことにレベル的に食い違いがある学生が多く、このような心理的側面を持った学生達を満足させ、且つ日本語能力を向上させるようなシラバスがC1レベルでは必要となる。

#### 5.1.4 コース開始時の学生の日本語能力

C1にプレースされた学生を対象にコース開始時に文法チェックテストが行われるが(プレースメントテストとは別に文法力をチェックするテストで、Bレベルのアーチブメントテストとほぼ同レベルに作られている)、このテストを見ると、初級文法が正確に身に付いていないことが分かる。クラス開始時の話す活動では自動化とはほど遠い発話しかできず、話すときに一文を自力で完結させることができない学生も多く、第二言語として日本語を学習した学生とは大きい違いを示す。また、極端に語彙数が少なく、文型は知っているが初級初期に習っているはずの語彙も分からない学生が少なくない。聴解力に関しても同様で、日本語に触れる機会が少なかったというのが大きい理由だろうが、力は非常に低い。教師には初級前半の学習者に対するような teacher talk が求められる。

#### 5.2 C1レベルの目標

C1は「総合日本語コース」全体の中で初級から中級レベルへの橋渡しの役割を担う初中級コースとして位置付けられる。学生の四技能をバランスよくレベルアップさせ、C2にスムーズに移行させることをC1クラスの目標とする。より詳しく述べると、初級文法の復習をしながらその運用練習を十分にし、中級へと進めるように基盤作りをすることが目標となる(表1)。また中級レベルでは読解力、作文力が求められるため、読解と作文にも重きを置くが、C1では様々なクラス活動を通して四技能の有機的な統合を図り、各技能のバランスのとれた育成を目指すことを大きな目標とする。

#### 5.3 C1レベルのシラバスの特徴

C1レベルのシラバスには以下のような特徴がある。

##### 1) 初級後半レベルの文法を扱った構造シラバス

初級学習が中途半端だったり、学習経験があっても適切に運用することができない学生のために、このレベルでは初級後半の文型をできるだけシラバスに組み込んだ。文法学習が言語習得を加速し、最終的には高いレベルへの到達に効果があることが研究でも明らかにされているため(Long (1988), Ellis (1994))、このレベルでの初級文法の習得は中級へのステップアップに不可欠なものだと考えられる。

このレベルの学生の文法知識は日本語学習背景が各々違っているため異なっている。そのため、効率的に授業を進めるために文法説明は明示的に行い、学生が

分からない点を明らかにし整理していく方法をとる。機械的な練習はクラス内では最小限にとどめ、宿題でその補強をする。クラス内では意味のある活動ができるだけさせ、その活動の中で形を意識させるよう心掛ける (focus on form)。またコミュニケーションな活動を通して伝達能力の育成を目指す。

## 2) 読解や話し合いのためのトピックシラバス

読むだけ、あるいは話すだけで終わるのではなく、四技能が有機的に結びついた活動を行うことで各技能のバランスのとれた向上を目指すために、C1レベルではトピックシラバスを採用し、1つのトピックについて多技能を使った活動をクラスで行う。読解教材は初級独特の文型中心のものではなく、内容に重きを置いたテキストにする。トピックとしては留学生が興味を持つような社会的、文化的トピックを選び、現代日本社会の一側面に触れることで各学生が問題意識を持ち、自分の意見を言い、話し合いができるようなクラス運営を目指す。シラバスに取り上げた読解トピックの一覧と一つのトピックの扱い方の例を下に示す。

<読解トピック一覧>

- ① 食生活のマナー ② 日本の教育 ③ 学生とアルバイト ④ 贈答の習慣  
⑤ 住宅事情 ⑥ 女性の生き方 ⑦ 私の町 ⑧ 日本に来て驚いたこと

<一つのトピックの進め方>

- ① トピックで扱っている語彙や表現を学生は予習しておく。
- ② 本文中の文型や表現を理解する。
- ③ 本文トピックに関するプリワークをする。
- ④ 本文を読み精読する。
- ⑤ 学生は自分の意見を言ったり、自国の事情を説明したりする。
- ⑥ 自分の意見や自国の事情をまとめて作文にする。
- ⑦ 添削指導を受けた作文をもとにクラスでスピーチをする。必要があれば話し合いの時間を持つ。

以上のように四技能を有機的に伸ばす活動になっている。クラス内での話し合いやスピーチ後の話し合いは学生間のインターアクションを促進し、伝達能力の向上に繋がる。

## 3) 場面・機能シラバス

学生が日本での生活を始めてすぐに遭遇する場面または生活に必要な機能をいくつか取り上げて、実用的な定型表現や談話構造を学習させる。しかし、これは生活に必要なすべての場面や機能を取り上げたわけではない。場面や機能の例を挙げると、「日本人の家を訪問する」「求人広告を見て電話をする」「不動産屋に行っ

て部屋を選ぶ」「謝る」「許可を得る」等である。

#### 4) 聴 解

必要な情報を聞き取るタスク形式の情報取りの聴解をする。ある文法にフォーカスした文法理解チェックの聴解ではなく、初級レベルの文法が複合的に含まれる教材を使う。聴き方としては、漠然と聞くのではなく、必要な情報を聞き取るスキニングを中心とし、一字一句がすべて分からなくても必要な情報を聞き取る訓練をする。

#### 5) 漢 字

「総合日本語コース」には5レベルの漢字クラスがある。C1に振り分けられた学生は漢字クラスも必修になっており、C1を履修すると同時に、個々のレベルに合った漢字クラスで系統立てた漢字教育を受けることができる。また、C1でも学生の漢字力をさらに高めるために漢字教育を行っている。C1で扱う漢字は読解教材中にある漢字語彙で、各課でそのトピックに関連した漢字語彙を読み中心に学習していく。

#### 6) 日本人学生がクラスに参加するインタビュー活動

KUSEPの学生を中心に日本人学生が留学生のチューターとなっている。実際多くの留学生が日本人と接触をして交流をしているが、中には大学にいながら、なかなか日本人学生と接触できないでいる留学生もいる。このような留学生はせつかく日本語を勉強していても、それを積極的に使う機会が少ない。このような学生の社会的ストラテジーを少しでも伸ばすために、C1クラスでは日本人学生をクラスに招いて活動を行う。これは留学生各々がテーマを持って日本人学生にインタビューをする活動で、学生は前もってテーマを決め質問事項を考えておく。クラス内でできるだけ多くの日本人学生に接触し、インターアクションを図り、同年代の日本人の考え方や日本語に触れる。この活動だけで社会的ストラテジーが身に付くわけではないが、学生一人一人のネットワーク作りのきっかけや手助けになればいいという考え方でシラバスに組み込まれている。インタビュー活動を行った後、学生は「インタビューレポート」として活動内容や結果をまとめて報告する。

## II. 新教材の開発

### 1. 教材開発の経緯

以上のようなシラバスに準じてクラス活動を進めるために、当初は既製のテキスト

(表2)と自主作成教材を併用していた。しかし、こちらが意図するような活動をするためには一部変更や補足、追加しなければいけない事項が多くあり、コースを進めるにあたって混乱を招いた。とくに会話教材は文法に焦点を当てたものが多く、内容的にも満足いくものではなかった。文法に焦点を当てつつも内容を重視する初中級レベルの会話教材を探すのがむずかしく、どの会話テキストにも一長一短があり、こちらのニーズに合うものは皆無であった。また読解教材においてもつぎはぎ状態だったため、教材に不備が生じたりした。

このような状況の中で、C1の特徴を生かした教育を行うためにはC1のシラバスに合った独自の教材開発が必要となった。またこのシラバスで実施したC1を修了した学生がC2レベルでいい成績を修めていること(表6)、またC1終了時に行ったアンケートで、取り上げたトピックや学習内容に関して学生から概ねいい評価が得られたこと等から、このシラバスを生かした教材作成に着手した。2001年12月より会話部分の教材作成を開始し、読解部分については、当初作成した教材なども踏襲しながら構成の統一を図っていった。2002年度後期開始時までには会話教材はほぼ出来上がり(文法関連練習やタスクを除く)、読解教材と合わせて現在進行中の平成14(2002)年度後期C1で使用中的である。

## 2. 新教材の内容

シラバス中のトピック別の会話と読解、さらにいくつかの場面別の会話で構成されている。幾つかの機能別会話や文法の宿題、および文法説明は今のところ他の教材を使ってカバーしている。

### 2.1 新教材のコンセプト

留学生に興味を持つようなトピックを通して日本の社会事情や文化・習慣に留学生の目を向けさせ、現代日本社会の真の姿の理解を目指す。各トピックは会話と読解で構成されており、会話文では各トピックに関する現代社会の問題を提起する話が展開され、学生の興味を引くと同時に、各学生に問題意識を持たせることを狙っている。読解の内容も単なる日本の事情紹介に終わるのではなく、現代日本社会の様々な側面を浮き彫りにした内容になっている。また日本を理解すると同時に自国を今の視点から振り返って再考したり、クラス内のインターアクションを通して互いに異文化理解をしながら伝達能力が向上できるようにした。また、様々な活動を行うことによって四技能の総合的な向上を図る。同時に初級文法の復習によって産出に繋がるような能力を養成し、中級へスムーズにステップアップができるような確かな足場造りを目指す。

## 2.2 教材の内容と扱ったトピック

新教材は1) サバイバル会話, 2) トピック別会話, 3) トピック別読解で成り立っている。

### 1) サバイバル会話

- ① 病院で ② 美容院で ③ ファミリーレストランで

異なる文化に入って生活する場合、真っ先に困るのはもちろん言葉の問題である。だが次に困るのはその場でどう適切に行動するかどうかだろう。ここで取り上げた場面会話では単に語彙や表現を覚えるのではなく、行動に関するスキーマの違いに着目できるようにした。例えば「病院で」では病院の玄関に入って、診察が終わるまでの行動の流れが分かるようにした。会話文は特に初中級用の平易な日本語にはせず、実際にその場で耳にする日本語を会話文として使った。

### 2) 会話・読解のトピック

- ① 食生活 ② 日本の教育 ③ 仕事 ④ 住宅事情 ⑤ 女性の生き方  
⑥ 日本人の宗教観 ⑦ ネット時代の人間関係

会話部分は読解部分と共通したトピックを扱っている。読解に入る前段階として学生達に問題提起をするために現代の日本社会を投影するような問題点を会話には幾つか盛り込んである。表面的な日本社会を見るのではなく、現実を直視し、共通の問題として考える姿勢を学生に求める。

## 2.3 会話部分の構成

各会話は以下のような構成になっている。

### 1) 会話文

留学生や日本人学生が登場し、問題を提起するような会話を展開させる。会話文には縮約形、省略、フィラーなどを多く使い、できるだけ自然な会話を心掛けた。

### 2) 語彙リスト

会話中の主要語彙を取り上げ、英訳を付けた。

### 3) 表現

会話中に現れる表現で、文型では扱わないが、定型的に覚えてほしいものを取り上げた。

### 4) 文型

会話文中の初級後半レベルの文型を取り上げてある。文法書として“A Dictionary of Basic Japanese Grammar”(The Japan Times)を推薦し、今のところ教材中に文法説明は載せていない。

5) 友達と話してみよう

会話文中に現れる機能を取り出し、ディスコースの形で練習する。この中には各課で取り上げた文型をできるだけ使い、文脈の中で文型が実際にどう使われるかを学生に意識させる。

2. 4 読解部分の構成

1) 読む前に (プリワーク)

本文に入る前に、扱うトピックに関して学生同士の知識を共有させたり、学生の持っているスキーマを活性化したりする。また扱うトピックに関して問題提起をしておくなどし、トップダウンの読解指導ができるようにする。また初級、初中級の学習者は未知の文法や語彙で読解がストップしてしまうことが多いので、この段階でキーワードの導入や漢字の読み方、重要な表現を説明しておき、ボトムアップの読解がスムーズに進むようにしておく。〈読む前に〉をすることによって、学生は読解に入る前の準備ができ、本文読解にスムーズに入っていくことができる。

2) 本 文

文中で使われている表現や文型は、ほとんどのものは初級レベルであり、初級の知識でだいたい文の構造が理解できるようになっている。

3) 語 彙

キーワードとその他の語彙を取り上げ、それぞれに英訳を付けた。

4) 表 現

本文中の表現文型などを取り上げ、用例によって表現の使い方を示してある。また必要があれば短文作りもする。

5) 自分の国について話してみよう (フォローアップ・ワーク)

読解で獲得した新たな情報や知識を統合した後は、それらをもとに自分の意見をまとめたり、意見を発表したりする。また、自国の事情と対比させたり、ディスカッションをしたりすることで、学生同士のインターアクションが行われることを目指した。またディスカッションを通して他国の事情理解や異文化理解にも繋げることができる。

6) グラフから何がわかりますか。

統計やデータをグラフ化したものを示し、そこから変化の様子や最近の傾向を読み取り、それについて説明したり、今後のことを推測したりする。同時にグラフを読み取る時に必要な表現も学習する。



### 3. 今後の課題

現在この新教材を平成14 (2002) 年度後期 C1 で使用中である。まだ学期の半ばであるが、今のところ学生の新教材に対する反応もよく、大きな問題はないようだ。新教材を使うことで、つぎはぎ状態は以前よりずっと改善された。しかし、この新教材が C1 のシラバスをまだすべてカバーしているわけではなく、特に聴解練習、文法練習やタスクなどは新たに作成する必要がある、残された課題は多い。今後は教材とシラバスとのギャップを埋め、四技能がリンクした総合的な活動がこの教材を使えばできるような内容の充実を図っていきたい。

#### 【参考文献】

- (1) 太田亨 (2000) 「『総合日本語コース』の創設と今後の展望」『金沢大学留学生センター紀要』第3号
- (2) 岡崎眸・岡崎敏雄 (2001) 『日本教育における学習分析とデザインー言語習得過程の視点から見た日本語教育』凡人社
- (3) 小柳かおる (1998) 「米国における第二言語習得研究動向：日本語教育へ示唆するもの」『日本語教育』97号
- (4) 竹内理 (2000) 『認知的アプローチによる外国語教育』松柏社
- (5) 宮崎里司・JV ネウストプニー (共編) (1999) 『日本語教育と日本語学習ー学習ストラテジー論にむけてー』くろしお出版
- (6) Ellis R. (1994) *The Study of Second Language Acquisition*. Oxford, UK : Oxford University Press
- (7) Long, M.H. (1988). Instructed interlanguage development. in L. Beebe (Ed.) *Issues in Second Language Acquisition*. Multiple Perspectives. Cambridge, MA : Newbury House.
- (8) Noriko Nagata (1998) INPUT VS. OUTPUT PRACTICE IN EDUCATIONAL SOFTWARE FOR SECOND LANGUAGE ACQUISITION *Language Learning & Technology Vol.1.No.2* January pp.23-40

## Setting up of Pre-intermediate Level C 1 Class of The Integrated Japanese Language Program —Report on Syllabus and Teaching Materials—

Yuri Nagano, Sachiko Sasahara and Yuuko Terashita

#### ABSTRACT

Presently at Kanazawa University, there are 7 levels of Japanese language classes ranging from elementary to advanced as part of The Integrated Japanese Language Program. However, of these 7 levels there is a one, C1 (Pre-intermediate) , which did not exist at the start of the course and was newly introduced in the second semester of 2000.

This paper will discuss the course of events leading to the establishment of level C1 and the necessity for its establishment, as well as the course contents and aims. Furthermore, a midterm report concerning the making of teaching materials for this course will be made.